

# 大山寺僧坊跡発掘調査成果Ⅲ

## J-14地点の造成地業について

前回は、寂靜山J-14の入口についてお話ししました。今回は、僧坊跡の平坦面がどのようにして造られているのか、お話ししたいと思います。

J-14の僧坊跡は、長辺が約37・5m、短辺約29・1mの長方形をしています。山の自然地形に、このような大規模な平坦地を造るには、かなりの土木工事が必要だったと考えられます。それを調べるために、この平坦地の中心から十字形に掘り下げて、調査しました(図1)。

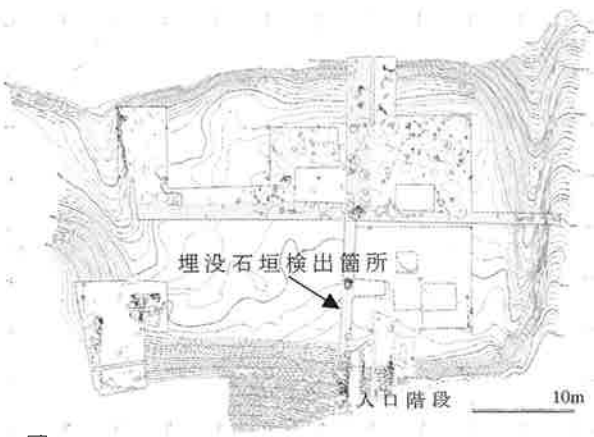


図1

## 埋没石垣について

その結果、山側(南側)では、高低差約5m、約60度の傾斜をつけた切土を行い、平坦地の真ん中辺りから北側では、その削り取った土を盛っていることを確認しました。(図2) その盛土の厚さは、最大で3m以上に達し、その中から石垣を検出しました。(写真1) 石垣の規模は高さ約1.3mで、自然石を7〜8段にわたり積んでいました。

石垣は、本来その造成地の法面を強化するために施されるものですが、それが地中から検出されたのはどうしてでしょうか？



写真1

これには二通りの可能性が考えられました。一つは、何回かの造成が行われ、その過程で石垣が埋まったと考えられるもの。もう一つは、頑丈な盛土造成を行うための工法と考えるものです。前者は、近世城郭ではよく確認され

るもので、城主交代をきっかけに、城の配置(縄張り)を変えてしまい、もとの石垣を埋めて、その外側に新たな石垣を組むというものです。有名な例は大坂城です。現在の大坂城は基本的には徳川家の大坂城であり、その地下には豊臣家の大坂城が存在します。後者の例には、京都市の烏羽離宮があり、軟弱地盤に石垣を組み、その中に石を入れて基礎工事を行っています。

今回の調査では、埋没石垣のさらに北側の下層にも同じような石垣の上端部が検出されたこと、その盛土内部に、埋没石垣に対応する生活面が検出されなかったことなどから、後者の可能性が高いと判断されました。

このように考えると、寂靜山地区の整然と区画された僧坊群は、自然地形を変える大規模な土木工事によって造られていたことが想像できます。

## 古記録を参考に

大山寺阿弥陀堂の棟札には「古常行堂、享祿二年洪水にておわんぬ。然る間、天文六年、新地を撰び地形を曳き改め、天文廿一年造立す」と記されています。この「地形を曳き改め」は、まさにこのような大がかりな造成工事であ

あったことを示すものと考えられます。大山寺僧坊跡には、合計160箇所前後の平坦面が確認されていますが、それらは規模の大小はあるものの、このような土木工事で造られたことが分かりました。僧坊跡の平坦面は、中世に隆盛を極めた大山寺の記憶を最も明瞭に、今にとどめています。

(社会教育課文化財調査班)

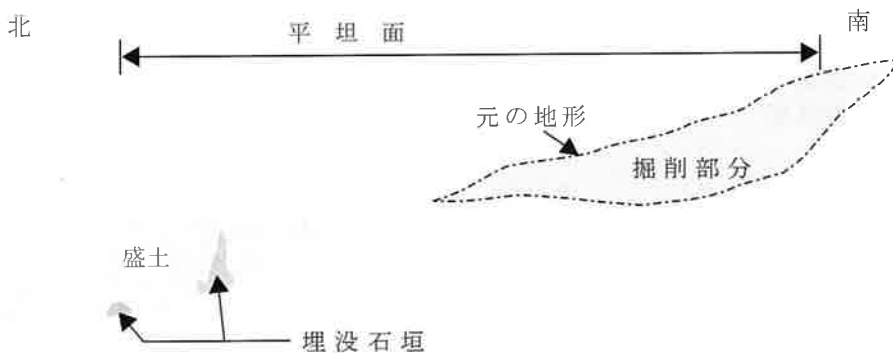


図2 寂靜山J-14南北断面造成模式図